

The Record by an Old Guy in the world of Virtual Reality Massively Multiplayer Online

とあるおっさんの VRMMO活動記



椎名ほわほわ

Shiina Howahowa

16

アリーン

海に住む人魚族の女傑。
仲間を率いて
赤鯨に立ち向かう。

ルエット

アースの指輪に宿る、
フェアリークィーンの分身。
ついに自分の名前を獲得する。

あか くじら

赤鯨

突如海に出現した、
殺戮の限りを繰り返す
危険なレイドボス。

登場人物
紹介

ルイ

エルフの村に住む、
アースの蹴りの師匠。

アース

本編の主人公。
マイペースなプレイで
すっかり有名人に。
リアルでは38歳独身の
会社員、田中大地。

アクア

妖精国の象徴・
ピカーシャの一体。
お忍びでアースの旅に
同行する。

1

黄龍様と龍神様から呼び出され、〈黄龍変身〉についての忠告を受けた翌日。自分——アースはアクアの背に乘せてもらって、龍の国からエルフの村へと移動した。

人目につかない所まで来たら空を飛んでもらい、大した時間もかからずに到着。久々の訪問だし、蹴りの師匠であるルイさんに不義理を怒られてしまうかも——そんなことを考えつつ、小さくなったアクアを頭に乗せて村に入った訳なのだが……

「何ということをしてくれた!」「極刑に処せ!」「森をなんだと思ってるのだ!」「裁け! 絶対に裁け!」

エルフの村には怒号が飛び交い、非常に殺気立っていた。

一体何があった? 以前来たときは、こんな風にエルフの皆さんが声を荒らげていた記憶はないぞ……とりあえず様子を窺うか? とても話ができるような気配じゃない。

より激しく怒号が聞こえてくる方向に歩いていくと、大勢のエルフが集まっていた。そしてそん

な皆さんに取り囲まれるように、昔の罪人みたいに手と首に枷かせをはめられている人族がいた。こんな扱いを受けるからには、何かとんでもないことをやったんだろう。

「皆の者、静かに！ 気持ちには分かるが静かに！ これより、これら六名が行った罪についてどのような罰ばうが相応ふさわしいかを決める！ できる限り感情的にならぬように！」

そんな中、一段高い場所にいる一人のエルフがそう宣言する。一斉に皆が静まったところからして、おそらく長老ランクの人なんだろう。

その様子を見た長老エルフさんは、一度静かに頷いた後でこう言った。

「改めてこの六名の罪を発表する！ こやつらの罪は、我らがエルフの森の木を勝手に伐採したことだ！」

あ、これは完全にアウトだ。エルフの森の木は勝手に切っちゃいけない、切りたいのであればエルフの皆さんの許可を得ること、ってちゃんと事前に説明があつたのに。

「さらに、切り出した数が数だ！ 数本だったならまだこまでの大事にはしなかった。だがあろうことかこの者達は、我らが調べただけでも七一本もの木を切り倒している！ それにより、森の一部にぽっかりと穴が空いたように木が消えてしまった！ その周辺で生きる者達の環境が狂ってしまい、大変なことになっている！」

それほど大量に切り出したら、そうなってしまふよな。大木ばかりだと日差しが遮さかられ、他の草

木が育たなくなってしまうので、ある程度の調整は必要だが……明らかにそんな範疇はんちゆうからは逸脱している。どう考えても無罪はあり得ない。

「さて、勝手に木材を切り出した人族よ、そのことについて何か言いたいことはあるか？」

容疑者にも発言の機会はちゃんと与えるのか。さて、何を言うのやら。

「木なんてあれだけあるんだ、あれくらい持ち帰ったって森は壊れねえよ！」「この木材は弓にも杖にも使えるいい木材なんだ、そんなお宝を独り占めしてるのが悪いんだろ！」「少し待てばまたすぐに元通りになるだろ！ いくらなんでもこんな枷をつけるなんてやりすぎだろう！ さつさと外せ！」「いい物を手に入れて、必要とする人に売る、俺達がやってるのは真つ当な商売だ！」

——ダメだな、話にならない。おそらくこの人達は、ネクシアやサースの街にある伐採場の気分でやったんだろう。つまり、おそらくプレイヤード。

というか、もしかして以前から龍の国とかで木材を買い占めていた犯人は……こいつらか？ こんなことをやらかすくらいだし、可能性はあるよな。

「ふむ、なるほど。では他の人族の者に尋ねようか。この者達の言っていることや考え方が一般的なのかどうかをな」

そう言ってから、何やら呪文を唱える長老エルフ。そしてその魔法が発動した途端、自分の視界はぐにやりとぼやけて、すぐにまたはつきりと見えるようになった。

ただし、そのときには周囲をエルフの皆さんに取り囲まれていた。一体何が……？

「近くにいた人族を三名、無作為に呼び出した。この者達から意見を聞こうではないか」

今の魔法はそういう効果だったのか。何とか状況を呑み込んだところで、長老エルフが自分達の前にやってきて、軽く会釈した後にかう言った。

「急に呼び出してすまない。だが、君達はこちらからそう離れていない場所にいたため、ある程度状況を理解しているはずだ。そこで、あの六人に対してどう思うかを教えてほしい。よろしく頼む」
隣の二人は、突然の展開とエルフの皆さんからの視線に萎縮^{いしゆく}してしまっている。ならばここは一つ、自分から質問しておくか。

「すみません、自分の考えを述べるために二つだけお聞きます。まず、彼らが切り出してしまったという木を見せてもらうわけにはいかないでしょうか？」

こう聞くと、エルフの皆さんの中から「我々の調べを疑うのか！」という怒声が飛んできた。だが、そんな怒声を抑えた長老エルフさんが、「よし、ならば見せよう。持ってきてくれ！」との指示を飛ばす。

そうして運ばれてくる数本の木材。まだ加工されておらず、ただ切っただけという状態のそれを観察した結果、自分はある判断をした。

「それからもう一つ質問です。彼らを取り押さえたときの状況を教えていただけないでしょうか？」

するとどうやら、彼らが森の中で木を切り倒そうとしているところを、パトロールしていたエルフたちが発見してその場で取り押さえた、ということらしい。その証拠品として、加工するための道具が突き刺さったままの木まで出てきた。

その木を見た途端、また周囲の殺気が強まる。ここまで証拠が揃っているなら、もう言い逃れはできないな。本当に七一本かどうかまでは分かんが、少なくとも勝手にエルフの森の木を切っていたことだけは間違いない。

「ありがとうございます。伺ったお話と見せていただいた証拠を検討した上で、自分が下す判断は……はい、有罪ですね」

枷をつけられている連中がこちらを睨みつけてくるが、知ったことかと自分は話を続ける。

「まず、全く知らなかったということであればまた話は変わりますが……エルフの皆様はきちんといくつも設けている案内板にて『森の木を勝手に切つてはいけない、どうしても切りたいときはエルフの許可を貰うように』と知らせています。それから、実は自分は一回だけ、今は亡きエルティルから許可を得てエルフの森の木を切り倒したことがあります」

この自分の言葉を聞いて、真剣な目を向けてくるエルフの人達。その視線に吞まれないように内心で気合いを入れ直してから、自分はさらに言葉を紡ぐ。

「そしてそのときに見た木の断面には……先程の証拠品の木のようなみずみずしさや生命力はあ

りませんでした。つまり彼らは、まだまだ生きることが出来る元気な木を切り倒してしまっている。それはすなわち、森にとって必要な木を切り倒してしまったと言っても良いと自分は考えます。それらの観点から、自分は彼らの行為を有罪と考えました」

長老エルフさんは一度頷いてから「よく分かった、では次の者の意見を聞きたい」と話を振った。結局他の二名も、自分なりの考えなどを述べた後に、有罪と判断した。

「我々だけでなく、人族達も罰すべしとの判断を下した！ よって彼らは牢へと連行し、より深く調べを進めた後で罰を下す！ ただし、どんなに軽くても永久追放の刑に処すこととする！」

ま、そうしないとおさまりがつかないよね、根本的なルールを破っちゃったんだから。

エルフの村が実装されてから結構時間が経ってるんだし、さすがに単にルールを知らなかったって可能性はあり得ない。プレイヤーであっても、こっちの世界の人であっても、ね。

そんな風にして有罪であると確定した六人は、そのまま村のどこかへ引つ張られていった。



「——なんてことがあったんですよ」

ここは蹴りの師匠であるルイさんの家。

なんでもルイさん、前日にかかなり疲れる訓練をやっていたそうで、訪ねたときは寝起き状態だった。それで、村が騒がしいけど何かあったの？と自分に聞いてきたので、その原因を報告していたのだ。

話を聞き終えると、ルイさんは「それは許されることではないわね」と怒気を孕^{はら}んだ声で呟いた。森と共に生きるエルフとしては、こう考えるのが当然なんだろうな。

「それにしても、随分とお久しぶりよね。あんまりにも来ないものだから、どこかで行き倒れてしまったのかと思ったわ」

雰囲気が暗くなったのを感じて、ルイさんが話を変えてきた。自分もこれ以上今の話題を続けるつもりはなかったたので、その流れに乗っかる。

「まったくもって申し訳ない。ただまあ、向かった先で色々あったんですよ……そう、色々」と獣人連合でもやたらと事件があったからなあ、特に最後の盗賊団との一件がなきゃ、もっと早くここに来られてたのに。まあ、きつちりと終わらせてきたから問題はない、はず。

「貴方に課す訓練は色々あるからねー？ しばらくはここにいられるのよね？」

急いでやつつけなきゃいけないことはないのですが、素直に頷く。自分としても、最近出番がなかった足技関連をここで鍛え直しておきたかったから、訓練は望むところである。

「森の見回りなどを捌^かめつつ、訓練を行っていくからね。それと、訓練なんだから貴方の頭の上に

いる子に頼っちゃダメよ。いいわね？」

アクアに頼ってたら訓練にならないからね、当然の話だ。久々に師匠にすごいてもらいますか……なまってるいいけど。「痛風の洞窟」以降、あんまりにも蹴り技を使っていないんだよね。



そして……やっぱりなまってるました、というのが結論だった。

そんな自分を見た師匠が容赦なくハードルをガンガン上げてくれるので、毎日ポロポロ。この一週間の行動内容は――

ログインしたら宿屋から出て料理を用意し、特設修練場に向かう↓ルイさんとひたすら戦う（基礎は叩き込んだので、後はひたすら戦うことで磨き上げていくらしい）↓ブツ飛ばされて転がされて、食事休憩までボール気分を味わう↓食事休憩中に必死で息を整える↓ログアウトするまでひたすら戦う↓ポロポロの体を引きずって宿屋まで帰ってログアウト。

こんな修行なんだかイジメなんだか分からない毎日を送っているおかげで、〈剛蹴〉のレベルアップ速度が異常なことに。三日目でレベル50になり、〈剛蹴（エルフ流・一人前）〉からEXPを3消費して〈碎蹴（エルフ流・一人前）〉に進化。それがさらにレベル31にまで上がってしまった。

いくらなんでも急激に上がりすぎだろう……ルイ師匠曰く、

「蹴りの修練はあまりしてなかったようだけど、肉体の強さそのものは以前と比べるとかなり上がってるから……その体にふさわしい訓練をしているだけよ」

ということらしい。こちらからしたら、ひたすらボールとして蹴られてお手玉されてゴールの中にぶち込まれた気分なんです。

ちなみにアーツは、まず〈剛蹴〉レベル50で《開門》という一種のガードブレイクの特性を持つ蹴り技を習得した。一発目の蹴りで相手の動きを封じて姿勢を崩させ、二発目の蹴りで門を蹴り開ける、というイメージのネーミングだと思われる。ただし、一発目の蹴りを放つにはかなりのタメ時間を必要とするので、相手との読み合い勝負になる。

さらに〈碎蹴〉のほうでは、レベル1で《幻体》という技を習得。体と足の動きで幻影を見せて相手の命中心力や回避を惑わす技だそう。スキル名にある「碎」きに行く前の事前準備、ということだろうか？

そしてもう一つ、レベル25で習得したのが《楔》。つま先で相手を三回蹴り、攻撃が全て命中すれば蹴った場所を結ぶラインの内部で爆発を起こす、というものだ。蹴った場所が離れているほど最終的な威力が上がり、まさに相手の体に楔を打ち込んで砕くアーツと言える。ただしマニュアル発動限定であり、自力でつま先での蹴りを成立させないといけないところなどは、体を使うVRな

らではだろう。

が、せっかく身に付けたこれらの各種アーツも、ルイさんには当たらない、もしくは発動前に潰される、という散々な結果に。よく言うように、当たらなければどんな攻撃も意味がないのだ。それどころかアーツを撃った途端に反応して、容赦ないカウンターがふつ飛んでくる。

そんなわけで、どれも使ったのは一回か二回だけ。マニュアル発動に切り替えないと通用しないかねえ。唯一オート発動がない《楔》は、蹴り方が明らかに変わるから簡単に見抜ける、とはルイ師匠のお言葉。

そんな一週間を過ごした頃、ルイ師匠が「そろそろいいかな？」とボソツと呟いた。

それを聞いた途端、ビクツ！と反応してしまった自分が嫌だ……

だがこの言葉の意味は、修練のレベルを上げることではなかった。エルフの森の見回りに行こう、とルイ師匠は言う。

なぜですか？ と問うと、森を走ることと足腰を鍛えるためだそうで。それに加えて、先日的事件を考慮して、エルフの皆さんの中では見回りを増やそうという空気が流れているらしい。ルイ師匠も自分がいなくて見回りに行ってたんだらう。

そういえば、先日牢に引つ張られていった奴らの末路も発表されていた。まず、エルフやダーク

エルフの領域からの永久追放。さらに全員に特定の腕輪と足輪が強制装着された。んで、その腕輪と足輪には、装着者の生命力と魔力を奪い取ってエルフの森の木々に与える、という効果があり、そうして吸い上げた力を新しく植えられた幼い木々の生長に用いるのだという。

木が生長すれば腕輪や足輪は自然と外れるそうだが、木は生長に時間がかかる。基本的に死ぬまで外れることはないだろう。

執行する刑の候補には、死刑も挙げられたらしい。しかし、殺してしまうと苦しみは一瞬で済み、それでは罪に対する報いとして不十分すぎるとして、このように長く苦しむことになる罰が下されたそう。

こうした発表を記したエルフの連絡板には、この六名のことは世界に広く広めた、とも書いてあった。つまり、あの六人は今後どここの国に行っても『その国の規律を守れない愚か者であり、犯罪者である』と知られることになる。

そうなれば……悲惨だな。誰だって犯罪者とは関わり合いを持ちたがらないだろう。それはすなわち、お店で物を買えず、宿屋にも泊まれなくなるかもしれない、ということだ。それ以前に、街に入れないかもしれない。

そうして孤立していけば、最終的に待っているのは死しかない。映画とかにあるような、法がないのが法なんていう悪人街なんてものでもなかったら、もうどうにもならないんじゃないかねえ。

「やっぱり魔物の数が急激に増えてるわね……修行も兼ねてどんどん狩るわよ！」
そして、木を切った人達に厳罰が下された理由の一つがこれ、魔物の大増殖だ。

というのも、定期的の大討伐をしなくてはならないとはいえ、基本的にこの森はモンスターの発生を抑える役目を担っているそう。これは基本的に部外秘だが、エルフに対して悪意を持たない、信頼できる者には伝えてもいいらしい。

ともかく、大量に木が消えたことでそんな森の力が低下し、こうしていちいち倒さなければいけないようになってしまっているのだ。

ちなみに自分の頭上には、今回も案内役として契約した、ハムスターに似た姿のキーン族のトラちゃんに乗っている。

「一つ、二つ、三つ！《楔》成立！」

ラインが走って、グラスホッパーを砕く。

早く使いこなせるようになるため、自分はこのように時々新しく覚えたアーツを組み込んで戦っている。久々に振るわれたレッグブーツの牙は、嬉々としてモンスターの体をえぐっているような気がするな……牙部分はドラゴンの素材で作っているから、その影響だろうか？

また、これも修行ということで、使っているのは蹴り攻撃系統だけ、とルイ師匠から指示があった。まずルイ師匠とアクアが数を減らし、自分だけで対処できる数になったら手出しはしないとい

う感じた。

ただ、それなりの時間をかけて戦っているのに、スキルレベルは全く上がらない。先に一気に上がった分の反動なのか？ それともルイ師匠との訓練が苛烈すぎたせいで、この程度の相手ではもう格下扱いになってしまっているんだらうか。

「うーん、数は多いけどそれだけね。見回りは必要といっても、これじゃアース君の訓練としてはぬるすぎるわ……サージェントランクじゃないとダメかしら」

師匠、今は大討伐中じゃないです。物騒なこと言わないでください……それにレベルが上がらないってだけで、弓も魔法もスネークソードもなしで複数のモンスターを相手にするのは結構きついんですよ!? そりゃ、確かに師匠にボコボコにされるよりはましですけどね!?

「よし、もうしばらく見回りをしたら……ダークエルフの領域で訓練しましょう! そうと決まれば、もっと魔物を討伐しちゃわないと。さ、アース君。次行きますよ!」

師匠、お願いですからもう少しペースを落としていただけると……聞いてくれそうにないなあ。

アクアも諦めなさいとばかりに首を横に振っているし、とらちゃんは肩に下りてきてポンポンと軽く叩き、頑張っ！って感じで応援(?)してくるし……行くしかないか。



「スキル一覧」

〈風迅狩弓〉 Lv 50 (The Limit) 〈碎蹴 (エルフ流・一人前)〉 Lv 31 〈百里眼〉 Lv 38

〈技量の指〉 Lv 54 〈小盾〉 Lv 39 〈隠蔽・改〉 Lv 7 〈武術身体能力強化〉 Lv 98 (↑8UP)

〈ダーク・スラッシャー〉 Lv 1 〈義賊頭〉 Lv 45

〈妖精招来〉 Lv 17 (強制習得・昇格・控えスキルへの移動不可能) (↑1UP)

追加能力スキル

〈黄龍変身〉 Lv 12

控えスキル

〈木工の経験者〉 Lv 8 〈上級薬剤〉 Lv 34 〈釣り〉 (LOST) 〈料理の経験者〉 Lv 27

〈鍛冶の経験者〉 Lv 28 〈人魚泳法〉 Lv 9

EXP 27

称号・妖精女王の意見者 一人で強者を討伐した者 ドラゴンと龍に関わった者

妖精に祝福を受けた者 ドラゴンを調理した者 雲獣セラピスト 人災の相

託された者 龍の盟友 ドラゴンスレイヤー (胃袋限定) 義賊 人魚を釣った人

妖精国の隠れアイドル 悲しみの激情を知る者 メイドのご主人様 (仮) 呪具の恋人

強化を行ったアーツ…《ソニックハウンドアローLv5》

2

森のモンスターが沈静化したと判断されるまで、現実^{リアル}世界の時間で一〇日もかかってしまった。これだけの時間をかけてやっとなるところからして、無断で木を大量に切り出した連中に重罰を科すのは当然だな、と改めて納得させられた。

幸いにしてエルフの皆さんに死者は出なかったものの、やはり重軽傷者は出てしまったようだ。そして、プレイヤールの一部は、森のモンスターを討伐する手伝いをしていた。今回の一件の原因となったような自分勝手な行いで私腹を肥やす連中ばかりではない、ということを証明したかったと言っている人もいた。

幸いエルフの皆さんもこの手助けの申し入れを受け入れ、協力態勢を構築。これにより、エルフとプレイヤールの関係が悪化することは何とか回避された。モンスターが沈静化した後も、もうしばらくは様子を見ようとエルフの村に滞在するプレイヤールが、それなりにいるようだ。

「何とか事態は治まったわね。貴方達の協力もあって助かったわ。予想以上の数だったから、私達だけではちょっとマズかったかも」

支度を整えながら、今回の事件を振り返るルイさん。

そう……最終的には、大討伐並みとまではいかないが、かなりの数のモンスターが森に湧いてしまったのだ。そのため自分の蹴りの修行は急遽中止となり、使える手段全てを使ってモンスターを倒す方向に切り替えざるを得なかった。

そしてあるプレイヤーが事のあらましとその影響、加えて援軍要請を公式掲示板で報告。それを見た人達が駆けつけてくれたおかげで何とかなった、ということになる。

「本当に、自分もあの連中には怒りを覚えますよ。これだけ大勢の人に余計な負担を強いたのでから」

当の犯人達は、何者かによってその顔などが大きく広められている。これまた掲示板からの情報だと、当初の予想通り彼らはプレイヤーからもこちらの世界の人からも何も売ってもらえない状況に陥っているようだ、という報告もあった。

顔が公表されている上、特徴的な腕輪と足輪のせいで、ごまかしようがない。これから長い時間をかけて、償いをしていくことになるのだろう。

「さて、それはそれとして。アース君、ちゃんと宿屋は引き払ってきたのよね？」

ルイ師匠の言葉に自分は頷く。

モンスターの大量発生が沈静化した結果、こう言っては何だが蹴りの修練相手がいなくなった。

また、マンネリ化を防ぐためにも、場所を移して訓練内容も変えようとのルイ師匠の意見に従い、今日から自分達はダークエルフの里に向かうのだ。行くのも久々だし、いい刺激になると思う。

「戸締り良し、火の元も良し！　じゃ、行きましょう！」

ルイ師匠の家はきちんと戸締りしたし、近所の人にもしばらく出かけるので家のことをよろしくお願いします、と頼みであるそうだ。

リアルだとそういうのって少なくなつたよな……お隣がしばらく旅行とかでいないと分かるや否や、犯罪行為に走るバカすらいるわけで……少なくとも、こうやって後のことをお願いしますと頼み、周りも気にせず行つてきかと送り出す光景はまず見ない。何とも寂しい気がするな。

ダークエルフの街に向かう途中の森で出会うのは動物だけだ。もちろん万が一に備えて警戒は解いていないが、モンスターと出くわすような雰囲気はない。

空気も穏やかで、先日までのピリピリとした嫌な感じもしない。沈静化が発表された昨日までは、森の中に入ったら〈義賊頭〉関連のアーツに色々とひっかかってたからなあ。第六感的な悪寒もセツトでついてきたし。

「また穏やかな森になつてよかったなあ……」

ついボソッと漏らした呟きはルイ師匠の耳に届いてしまったようで「ホントね。大討伐でもないのにあんなことになっちゃって……取り返しをつかないことが起きなかったのは本当に良かった

わ」と同意された。

確かに、その通りであるな。エルフの皆さんは元々人口がそう多くないのに、さらに数が減ってしまったらかなりマズい展開になる。最悪種族が消滅するとかね。

時々チチチチ……と鳥の鳴き声が聞こえる穏やかな空気の中、自分達とはとらちゃん案内で森を抜け、無事ダークエルフの街に到着した。ここは今日も活気にあふれている。

「メイドさ〜ん、こっち向いてー!」「ああ、ここは楽園だ。楽園はここにあったんだ」「ああ、こっちに永久移住したい。そしてメイドさんと仲睦まじく暮らしたい」

——うん、活気にあふれている。

さて、まずは宿屋を見つけて腰を落ち着けないとな。って、なんかルイ師匠がそわそわしているな？ 何か問題が発生したのか？

念のため、周囲の様子を《危険察知》にて念入りに調査したが、これといって危険な感じのするものは見つからない。なんだ？

「ね、ねえアース君」

緊張した面持ちで、ルイ師匠が話しかけてきた。何だろう、修行の内容の発表なのか？ それとも何かしらのトラブルの前兆を感じているのか？ 何を言われてもいいように身構えた自分に、ルイ師匠は言葉を続けた。

「やっぱり男の子って、メイドさんが好きなの？」

それを聞いた途端、脱力して orz の体勢になってしまった自分。

緊張して損したと言わなきゃいいのか、はたまたそんな話で済んで良かったと安心すべきなのか……頭の上にいるアクアも「びいひゅ〜……」と、まあ何とも気の抜ける鳴き声を発する。そうか、アクアも緊張していたんだな。

「ど、どうしたのアース君!? ほら、しっかりして」

こうなる原因を作ったのはルイ師匠、貴女^{あなた}なんですけどねえ。そんな反論をしても暖簾^{のれん}に腕押し^{うで押し}か。

それは置いておくとして、ルイ師匠がこんなことを口走ってしまうのも無理はない。何せそこらじゅうにクラシックロングスカートのメイド服を着たダークエルフの女性と、彼女達に声をかける男性の姿が多数見受けられるのだから。この男性というのはプレイヤーに限った話ではない。本当に、ダークエルフの街がメイドの街になりつつあるな。

(あのときの自分を殴りたい)

こういう風潮が広がる原因を作ってしまった一人としては、頭が痛い。今日はもう宿屋に戻ってログアウトしようかな……メイドは嫌いじゃないけどさ。ここまで流行^{はや}ってしまうのもなんだかなーと思うわ……

幸いダークエルフの皆さんも楽しんでやってるようで、嫌々感じがしないのは救いかな？

「帰るとき、一着ぐらい買おうかしら？ あそこで売ってるみたいだし」

そんなルイ師匠の言葉に『ん？』となった自分は、ルイ師匠のしているほうを向く。そこには『メイド服、仕立てます』『ダークエルフ名産、メイド服をお土産に如何でしょうか!?』などのうたい文句が書かれた店が……いかん、本当に頭痛がしてきた。

掲示板でも、メイドカフェがいくつも出来ているとかいう書き込みを見た気がするが、勢いがますます強まっているぞ。なんでこうなったのよダークエルフの皆さん。

そんな頭の痛くなる光景はさておき、宿探しである。幸いすんなり見つけることができたのだが、部屋の取り方でルイ師匠と揉めた。

自分は個室二つを提案したところ、ルイ師匠は二人一部屋を主張。お互いの言い分としては、自分は『恋人でも親子でも夫婦でもない異性が二人一部屋はマズい』。ルイ師匠は『二人一部屋のほうが安いし、アース君のことはエルフのこともあつて信用している。それに、師匠と弟子なんだから同じ部屋にいても問題ない』という感じ。

双方譲らず、宿屋の御主人を困らせてしまった。結局、これ以上言い合ってもきりがないと判断した自分が折れることに。ルイ師匠はちよつとだけ勝ち誇った顔で部屋の鍵を受け取っていた。

三階の部屋に入ってひと息ついたところで、ルイ師匠から今後についての大まかな指示が下った。「とりあえず、ここでも最初は蹴りのみを使って魔物達と戦ってもらうわね。貴方の妖精と私は、危険な状況になるまで手助けしない。それである程度の数をこなしたら、新しい技術を身に付けるための修行に入る……という感じになるわ。ちなみに、真剣にやらなかったら……」
やらなかったら？

「私にメイド服を数着買ってもらいまーす！ 結構お値段するみたいだから、そんなことにならないように真剣にやってね♪ ま、今までの様子からして大丈夫だとは思うけど」
後でお店に行つて確認したら、一着で八万ゲローほどもしました。

ええ、今まで以上に真剣に特訓すると心に決めました。メイド服破産なんて御免ごめんこうむるつての！



ダークエルフの街に來た翌日。ログインして早速、自分はルイ師匠の指示の下で蹴りの修行を始めた。相手はもちろんダークエルフの谷にいるモンスターだ。

こいつらとやり合うのも久しぶりだなと思いつつ、蛙タイプのモンスターとやり合う。今回ルイ

師匠から新しく与えられた課題の一つとして、武器の装備を禁止された。そのため、弓や魔剣の【惑^{まど}」、盾に仕込んであるスネークソードは使えない。盾は純粋な盾としての使用に限定。

「あらゆる得物が使えない状況を想定した訓練だからね。そういう状態に追い込まれてしまう可能性はゼロじゃないでしょう？」

というルイ師匠の言葉には大いに同意できたので、素直に従った。

さすがに蹴り系統のアーツまでは禁止されていないので、身体強化系のアーツと組み合わせた空中コンボなどで相手を蹴り倒していく。ただ、蛇タイプのモンスターは蹴るのが難しいので、蛙やリザード系に比べると苦戦してしまった。

ここに来てからの訓練は、今までの中で一番真剣に行っている気がする。いや、気のせいじゃないな。何せ今日ログインしてからこの谷に降りてくる前に、ルイ師匠が怖ろしいことを言い出したからな……それを回避するために、つい必死になってしまっているのだろう。

くっ、また思い出してしまった！

「ねえアース君。もし今日からの訓練であまりにも無様な姿を見せたり、真剣にやらなかったりした場合は……これ、買ってもらうからねっ？」

ルイ師匠が何気なく手渡してきた一枚の紙……そこに書かれていた内容に目を通した自分は、時

間が止まったかのようにその場で固まってしまった。一着のメイド服のために、お値段四七〇万グロ……だ、と!?

詳しく見ていくと、ダークエルフが手に入れられる最高級の素材と最高の技術を、一切の妥協なく盛り込んで仕立て上げた、これ以上ないというぐらゐ最高級の品らしい。

見た目の良さだけではなく、防御力、魔法抵抗力を金属製の鎧と大差ないレベルに引き上げた上、多種多様な付与魔法まで施されている。それこそ、汚れ耐性とかの生活面のものから、治癒力向上、耐久性能などの戦闘に関わるものまで。

当然それだけの手間をぶち込めば、お値段も跳ね上がる。結果、あれほどぶつ飛んだお値段になった訳だ。だが、確かにあんなお値段がするだけの価値はある。安っぽい言い方だと、人の手で作り出せる至高のバトルメイドドレスといったところか。決してばったくりではない。

そしてさらに恐ろしいことに、需要はそれなりにあるようだ。渡されたのはチラシの一種なんだが、戦うメイドに大人気、とある。お金って、ある所にはあるんだねえ。

だが、だが。それを自分の懐^{ふところ}から出すとなれば話は別だ!! 色々と稼いで来たけど、四七〇万グロなんて大金を支払ったら、一発で借金生活に転がり落ちる!

もちろんルイ師匠も、修行に手を抜くことがないように言っただけなんだろう。けど、だからって腑^ふ抜^ぬけていれば、本気でそういう方向に動くかもしれない。『事前に言っておいたよね?』と素

晴らしい笑顔付きで。

そんな未来を回避するためにも、修行は真剣そのものだった。いや、そんな脅しがなくなったって真剣にやるつもりでしたよ？ 戦いにおける引き出しは、いくらあっても困ることはないのだから現実でだって、話術という戦いにおいて引き出しの多さは大切だ。結局、どれだけ時代が流れてどれだけ技術が進んでも、人間の根本が変わらなければ大差ないということか。

こんな考えがふふよと頭に浮かんで消えるが、そっちに気を取られていてはバカ高いメイド服を買わされる羽目になってしまう。

頬をぱんぱんと軽く叩いて気合いを入れ直し、新しく現れたリザードタイプのモンスターと対峙する。するするっと近寄ってきての噛みつきや、尻尾を振り回す攻撃の一発性は侮れない。

まずは、フェイントを入れて噛みつきを回避する。わざと、前に出るぞ、という感じで前傾姿勢を取って置いて、実際には前に出ない。これで向こうの目測が狂って踏み込みが浅くなったため、回避行動は少し後ろに下がるだけで済んだ。

噛みつきを外して閉じた口付近に、靴のつま先に仕込んだ牙を食いこませる。ドラゴンの骨で作ったある牙はあっさりとは鱗を貫いて突き刺さり、リザードを後退させた。

だがリザードもお返しとばかりに体を回転させ、尻尾の一撃を見舞ってきた。自分は大きく飛び

のいてこれを回避。さすがにギリギリまで引き寄せておいて反撃するほどの余裕はない。盾で受けても、重量差で吹き飛ばされる可能性があったから、ここは大人しく回避に全力を注いだ。

焦る必要はない、近くに他の敵の反応がないことは確認済みだ。今はこいつとの戦いに専念できる。

そこからは一進一退が続いた。やはり飛び道具である弓や、近接武器の中でも射程のあるスネークソードが扱えない分、戦いの選択肢が減る。というか、元々の戦闘スタイルはそういった各種武器と道具を使う形だったから、こういう一つの手段に限定した戦いの経験がほとんどない。

自分は色々やれる分、経験が分散してしまっているのだ。ゲーム的な意味としてではなく、プレイヤーとして。

その後、倒すまでには二〇分ほどかかった。蛙や蛇タイプに比べて頑丈なのが売りなりザード系だからなあ。前に来た時に苦戦しなかったのは、PTを組んでいたからという理由が一番大きい。やっぱり数は力だな。量より質で事態をはねのけるというのはなかなか難しい……このレベルになつてくると尚更そう感じる。

「お疲れ。今日はそろそろ引きあげましょう。帰りは私も戦うし、その妖精さんも参戦解禁ね」
ルイ師匠からこんなお言葉が。かなり疲れてきているし、これ以上は精神的な疲労でミスが増えて修行にならないか……そう見極めがついたので、今日は終わりということだろう。

小休憩してから街に帰るために歩き出したのだが、帰りはルイ師匠が蛙だろうが蛇だろうがリザードだろうが蹴り飛ばし、アクアも嘴くちばしで貫いたり魔法でブツ飛ばしたり、自分の出番は全くなかった。が、ただ何もしないのではもったいないので、ルイ師匠の動きをよく見ておいた。見るも修行というからね。取り入れられるところは取り入れていきたい。

行きはよいよい、帰りは恐い。そんな童歌があるが、今回はその正反対で、行きが辛くて帰りは楽だった。

街に帰って腰を下ろすと、ルイ師匠から今日の戦いを総括され、蹴り方や立ち回りについていくつか指摘を受けた。やはり各種武器を用いる立ち回りが染み付いてしまっているようで、もう少し積極性を持たないと戦いが長引き、疲れたところをばくつとやられちゃうよ、とのこと。

それは分かっているんだが、どうにも自分は見切りが甘い。近接メインのプレイヤーならとつくに超えている壁でつまづいているんだろうな。

まあ、それを乗り越えるのが修行だ。ゲームでもリアルでもそこは変わらんなあ。ただし、ゲームは乗り越えられなきゃ乗り越えられないで遊び方はいくらでもあるが、リアルだと乗り越えられなきゃ置いていかれて落ちこぼれる、という点は違うな。

そんなことを思いながら街を歩いていると、背後から「あら？　もしかして貴方様は？」という声が聞こえてきた。なんだか聞き覚えがあるような……そう思っただけで振り返ると、そこには三人のメ

イドさんがいた。

「二やはりアース様でしたね。お久しぶりです。覚えておいででしょうか？」

彼女らは、以前一時的に自分が主人となり、PTも組んだ三人のメイド。名前は……そうそう、サーナ、シーニャ、スーだったな。思い出すのに少し時間がかかるぐらいに久しぶりだ。それともこれは歳のせいかな……？　いや、仕事の上司は自分より二〇以上年上だが、名前を思い出すのに時間がかかることはなかったよな。単純に自分の問題か。

「二どうなさいました？　お疲れなのではありませんか？」

ああ、思い出してきた、以前もよくハモる三姉妹だったよな。心配させたくはないので、首を横に振って否定しておく。

「久しいな。仕事のほうは順調かい？」

「二はい、あのときアース様に同行させていただいたことで多くの経験を得られ、今では一人前のメイドとしてご主人様に仕えさせていただけております」

そうかそうか、それなら安心だ。せっかくだし、あれからどうなったのか聞いてみるのも悪くないかな？

という訳で、ルイ師匠を交えて近況報告会。まず自分の近況と、ここを訪れた理由を伝えておく。まあ理由と言ったって、修行のひと言で終わっちゃうんですけどね。

三姉妹のほうは、あの館の主人に仕える一方で、メイド喫茶に出向いてサポートすることもあるらしい。店の手伝いはもちろん、メイドとしての立ち振る舞いやもてなし方、そして厄介な客のあしらい方など、やることは多岐にわたるようだ。

「そうか、ご当主も健康そうでありより。体が一番大事だからなあ」

自分が立ち去った後にダークエルフの街で起こったことは、メイド文化の大躍進以外は特にないか。いや、あつたら困るんだけどね。ましてや自分はダークエルフの崇めて^{崇め}いる神（？）に会ったりしてるので、何気ない行動で何かおかしいことが起きる可能性もある。幸いにしてそんなことはないようでホッとした。

「あれから我々が主人は積極的に他種族の者と交流し、語らいの場を持つことを楽しみとしております。アース様にも修行の合間に館に遊びに来ていただければ、主人もさぞ喜びましょう。お気軽にいらつしやってください」

シーニヤからの言葉に、ふむ、と自分は少し頷きながら顎^{あご}を撫でる。元々あの館のご当主は社交的だとは思ったが、よりその間口を広げたのか。万が一客の中に暗殺者や泥棒が交じっていてもあのメイド部隊の目はそうそうごまかせないだろうし、な。

そして何より、あのご当主の目が曇^もっているとも思えん。自分が心配することでもないな。

「分かった。ある程度修行のほうが仕上がったときにでもお邪魔させてもらうことにします、と伝

えてもらえるかな？ 今はこちらのルイ師匠の下で修行の真っ最中で、そっちに専念したいから」

メイド三人姉妹は「『承りました、いらつしやることを楽しみにしております』」とハモってから、立ち去っていった。

「彼女達もなかなかの使い手のようね、やはり街にいるメイドの恰好をしただけの人とは違うってことかしら」

ルイ師匠はそんな感想を持ったようだ。実際、彼女達は綺麗なお飾りではない。戦闘力が高いいだけではなく、料理などの生産、支援能力も持っているため、一回PTを組んでみれば、一PTに一メイド、なんて言っても笑う人はまずいないだろう。

「一緒に組んだこともありますが、頼りになりましたからね。そのときはまだ見習いレベルだと言っていましたけど、今はもっと実力を上げているでしょう。自分の物差しではちょっと測り切れないところもあります」

ルイ師匠が彼女達と話す間にある程度力を見切ったのに対し、自分はまだ感じ取ることができなかった。実力を知るには戦っているところを見るしかないが、今は組む理由が全くない。まあ、どうしても知りたいことでもないし、もう一度あのお屋敷を訪れるという約束以外は忘れてしまつて問題ないな。

「さて、今の時間で休憩できたでしょうから、日が落ちるまで私と組み手をやってもらいますよ」。

確かこっちに修練場があったはずだから、そこを借りましょう」

え!? 今日はあれだけモンスターと戦ったんだからもう終わりじゃなかったんですか!? すっかりへとへとなんですけど……自分の本音はこうだったのだが、がっしりと腕を掴まれてしまって逃げ出すことができない。そしてルイ師匠はボソリとひと言呟く。

「四七〇万グローのメイド服」

それをここで言いますか! 逃げる訳にいかなくなっちゃうじゃないですか! 覚悟を決めるしかないな。まあ、覚悟を決めようが決めまいが、待っている結末は同じなんだろうけどな。

そしてそれから三〇分ほど組み手を行って、ぼこぼこにされました。師匠のギアが一段上がるだけについていけなくなるんですよ……一回ツヴァイとかレイジを引っ張ってきて戦ってもらおうかな? 彼らだったらいい勝負をしてくれそうな気がする。

3

それから一週間は、谷に降りてモンスターを狩り、ある程度狩ったら引きあげて師匠にボコられる、という毎日を送った。エルフの村にいたときよりも師匠のギアが上がってるんで、気が付いた

ら地面に転がっていたということもしばしば。かといって、長時間そうしている訳にはいかない。

「あと十数えるうちに立ち上がってこなかったら、メイド服確定ね」

なんて容赦ない言葉が飛んでくるからだ。ほんとにもう、誰だよあんなふざけたメイド服作り上げたのは! おかげでメイド服が恐怖の対象になってしまいそうだわ。

なんだか気分は、テンカウント以内に起き上がった戦闘の意志を見せるもまた倒され、もういいよねと思ってもセコンドがそれを許さない状況に陥っているボクサーだよ。再起不能になる前にタオルを投げてくださいとぼやいても、そんな優しさは影も形もないと来たもんだ。へるぷみー。

「ほら立つの! 修行はこんなものじゃ終わらないのよ!」

ぎゅっぎゅー。変な言葉が口から漏れていくような気がする。それにしてもこう毎日ぼこられていると、『本当に自分は強くなっているんだろうか?』って疑問に思うようになってしまった。

いや、確かに初日と今では、モンスターを倒すスピードとか回避率とかは上がっているような気もする。スキルも上がっているしね。特に〈武術身体能力強化〉のレベルは99に到達し、次の進化先を考えている最中。

でも、それだけスキルレベルが上がっても師匠には全く太刀打ちできないのよ。格闘ゲームで言うならパーフエクト負けを連発している状況だ。

それでもなんとか食らい付いていったおかげで、幸いにして例のバカ高いメイド服を買わされる

ような事態にはなっていない。それにきつい修行ではあるけどなんだかんた言つて、暇だ暇だとかばやきながら、何の目的も見いだせずただログインしているだけよりはいいかなとも思う。大抵MMOをやめるときってそんな感じになるからね。楽しみが見いだせなくなつて、知り合いもいなくなつちゃうとやる意味がなくなるというか。

その点、「ワンモア」は一度深くはまるとこつちの世界に知り合いができるところが面白い点なのかも。

「ん、今日はここまで。いったん休息をとりましょう。エルフの村でもこつちに来てからもずっと修行漬けだったからね。休息を終えたら、いよいよさらなるエルフ流の蹴り技の伝授に移るからね。足のほうも前より一段、いや二段階ぐらい強靱になつたようだし。頃合いでしょう」

おっと、そうなのか。師匠がそう言うならそうなんだろう。色々な場所を歩き回ってきたから、蹴り技は使つてなくても肉体そのものは鍛えられていたんだ。そこにスパルタな修行をつけたことで形になったのかもしれない。まあ、それならそれでいいや。

それにしても、休息か。じゃああのお屋敷のご当主の所に顔を出しに行こうかな？ アクアに無理を言えば他の国にも行けるけど、差し迫つた用事はないからなあ。大人しくこの街でできることをしておこう。

そしてやってきた、例のメイドを従えているご当主のお館。アポとか取つてないから会えない可能性は高いけど、その場合は都合のいいときを教えてもらつて出直そう——そう考えていたのだが、あつさりと通されてご当主と再会した。

自分の素性などはばれているので、外套を脱ぎ、ドラゴンスケイルヘルムも、顔を隠すフェンリルの頬当ても解除。頬当てを外すと、少しだけ顔がひんやりする。

「ようこそ、我が館へ。こうして会うのは久しいが、そちらの調子はいかがかな？」

ご当主様はそんな言葉で歓迎してくれた。なので、ここを離れてから戻ってくるまでにあつたことを伝えていく。話せないことも多く少々虫食い気味になつてしまうので、おかしくないように話を継ぎ足したりもした。こういう罪にならない嘘のつき方は、大人になれば覚えてしまうものなんだよな、悲しいねえ。

もちろんご当主もその辺は分かっている可能性が高いが、あえてなのか突っ込んでこない。そこもまた上手くやつていくために必要なことだ。

「……とまあ、こんな感じでしたね。退屈はしませんでしたが、こんなに走り回る必要があるのかと思つたりもしました」

自分は最後にそう言つて^{しめ}とした。七割は事実を言つたから、十分だろう。

「なるほど、冒険者と呼ぶにふさわしい旅だったようだ。それにしても、多数のバッファロー達の

強襲か……獣人達はかなり苦勞したな。苦勞せずに生きている者などどこにもいないだろうが……」
まあそうだな、誰だって差こそあれど苦勞はしていると思う。ゴージャスな生活をしている人でも、そんな生活の維持とか、財産目当てに寄ってくる親戚を名乗る赤の他人や泥棒への対処とか。運よく宝くじの一等を当てた人だってそうだ。大金に群がってくる金の亡者は多いからな。

そういや、冗談半分で買った宝くじで予想外にひと山当ててしまったあいつ、あれからどうなったかな。協力できることはしたが……上手く逃げたかな？

「話は変わりますが……街でメイド服が販売されているではないですか。アレはもしかして……？」
自分の質問に、ご当主は頷く。

「うむ。実はな、他の種族を招いて話をしたときにだな、『あのメイド服という物を、譲っていただく訳にはいかないだろうか？』と聞いてくる者がかなり多くてな。その要求に応えようと試験的に売り始めたら、予想以上に需要があつてな。今では名物の一つになってしまったぞ」

はっはっはと笑うご当主。やっぱりこのご当主が関わっていたのか。

ならばと、あのぶっ飛んだお値段のメイド服についても聞いてみると――

「ああ、あれか。一応念を押しておくが、決して暴利ではないぞ？ 貴重な素材に全力をもって各種エンチャントを施した一品だからな。一着作るのにも時間も手間もかかるから仕方がないのだ。それでも、我がメイドが着ている物のダウングレード版なのだがね。あの性能が市場に流せる限界

点だな。それ以上は機密となってしまう」

なんと、まあ。このメイドの皆さんが着ている服は、あれ以上の化け物効果と防御力を兼ね備えた品なのか。そう教えられるとつい、隣に立っているメイドさんの服をまじまじと見てしまう。うーむ……見た目は普通のメイド服なのに、並の鎧以上の防御力があるとは。

「あの、もしよろしければ……触ってみますか？」

メイドさんがそう聞いてくるが……本当に触ったら色々とアウトすぎる。というか、いくらなんでも見すぎたか。リアルだったらセクハラで訴えられてしまうな。

「いえいえ、それには及びません。むしろ、とんだ失礼を」

つい、日本刀や鎧を眺める気分で見ってしまったよ。トンデモ性能であっても、服であるということをつい失念してしまっていた。そもそも、普通は服だけを見ているなんて受け取らないよな、何をやってるんだ自分は。反省しないと。

しかし、ご当主の考え方は違うようだ。

「遠慮しなくてもいい。別段やましいことを考えていた訳ではないということぐらいは分かるぞ？ ましてや冒険者だ、優秀な防具に興味が湧かないほうがおかしいからな」

そう言われましても、やっぱり女性をじろじろと見るのは失礼だ。恋人とか伴侶とかだったらじっくり見てもいいだろうけどさ。

「さすがにそういう訳には。やはりよく知らない異性にじろじろ見られるのは落ち着かないでしょう」

自分の受け答えを聞いたご当主は「ふうむ、まあそれは確かにそうか」と言いながら顎をさすり、そのまま目を閉じて考え始め……数秒後に目を開く。

「ならば、再びアース殿の所に我がメイドを派遣すればいい話か。そうしてお互いのことを知れば、見るのも見られるのも抵抗はなくなるだろうからな」

それは実に魅力的な話ではある。ではあるが……今はルイ師匠との修行中だ。ここで下手にメイドさんをお持ち帰りなんてしたら、何を言われるか分かったものじゃない。

それだけではなく『やっぱりメイドが好きなのね。じゃあ私もメイド服を着て指導するから、あのメイド服を買ってね?』とか言われそう。今はまだ冗談半分で言っているだけだろうけど、ここで下手を打って本気に切り替えられたらマズい。

「ありがたいお話ではありますが、先程お話したように私は修行を行うためにこの地を訪れておりまして。ここでもしメイドさんを派遣していただき、連れ帰ってしまうと……色々と変に勘ぐられてしまいそうで怖いのです」

『君子危うきに近寄らず』だ。この場合は『虎穴に入らずんば虎児を得ず』という状況には一〇〇パーセントならない。そもそもメイド服を見ていたのは、布にそこまでの防御能力をつけるのがす

ごいなと純粋に感心したからであって、このメイド服の秘密を暴いてやろうだなんて気はない。だからここでメイドさんを連れ帰っても、自分にとつては損をする展開ばかりだ。

それに連れ帰っても、やつてもらいたいことは特にないし、修行で基本的にソロ行為を強要されているのでPTも組めない。料理だって自分でするし。

「ふうむ、それならば仕方がないか。いや、実は前にアース殿に派遣したあの三人……予想以上に腕を上げて帰ってきたのだな、また鍛えてやつてはもらえないかという考えもあったのだよ」

ほう、そうだったのか。こっちこそ、あの三人とPTを組んだときはかなり助けられた。戦闘はもちろん、食事の用意などもしてくれて本当に楽だった。まあ今は、それに甘えることが許されない状況に置かれているのだが。

「そうでしたか。特に用事がなければ請け負ってもよかったのですが……申し訳ありません」

こちらが頭を下げると、ご当主も「いや、それはこちらの一方的な希望に過ぎん。気にしないでくれ」とのお返事で、気分を害させることにはならずに済んでほっとする。

さて、色々と話していたら結構な時間が過ぎてしまった。そろそろお暇いしましうか。

「では、今日は失礼させていただきます。本日は突然押しかけたにもかかわらず、これだけのおもてなしをありがとうございました」

そう言って自分は椅子から立ち上がり、深々と頭を下げる。

「気にしないでほしい。私も楽しませてもらった。またいくつか冒険をした後にやってきて、話をしてくれると嬉しい。待っているぞ」

ご当主からのお言葉をいただき、メイドさんに案内されてお屋敷の外へ。

さて、今日はこのままログアウトして、明日からまた修行だな。そうして立ち去ろうとした自分の左手を、案内してくれたメイドさんがそとつかんで耳元でひと言。

「またのお越しを、心よりお待ちしております」

そして、耳たぶに何か柔らかい物が触れたような感覚が。

危うく変な声が出そうになったが、何とかこらえた。不意打ちすぎるだろう。何とも気恥ずかしくなってしまったので、外套を再び纏い、頬当てやドラゴンスケイルヘルムを再装着してそそくさと立ち去った。

今、自分の顔を見たら、変な表情を浮かべているんだろうな……見たくもない。さっさと宿屋に帰ってログアウトして、リアルでも寝てしまおう。うん、それがいい！



翌日ログインした直後、指輪からフェアリークイーンの分身体がちびキャラ状態で出てきた。

それは別に構わない。ちびキャラ状態なら、一度呼び出すと二週間は出てこれない条件には引つ掛からないから。それに今は急いでいる訳でもないし。

しかし、別の形で問題があった。分身体の着ている服が、メイド服なのである。とうとうこいつにまで……

「どうでしょう？ 可愛いですか？」

ポーズを決める分身体。狐耳の美人がメイド服を着ているのだから、こういったものが大好きな人には強烈なアピールとなるだろうが……自分の口から出てきたのは溜息だけだった。

「あーはいはい、かわいいかわいい」

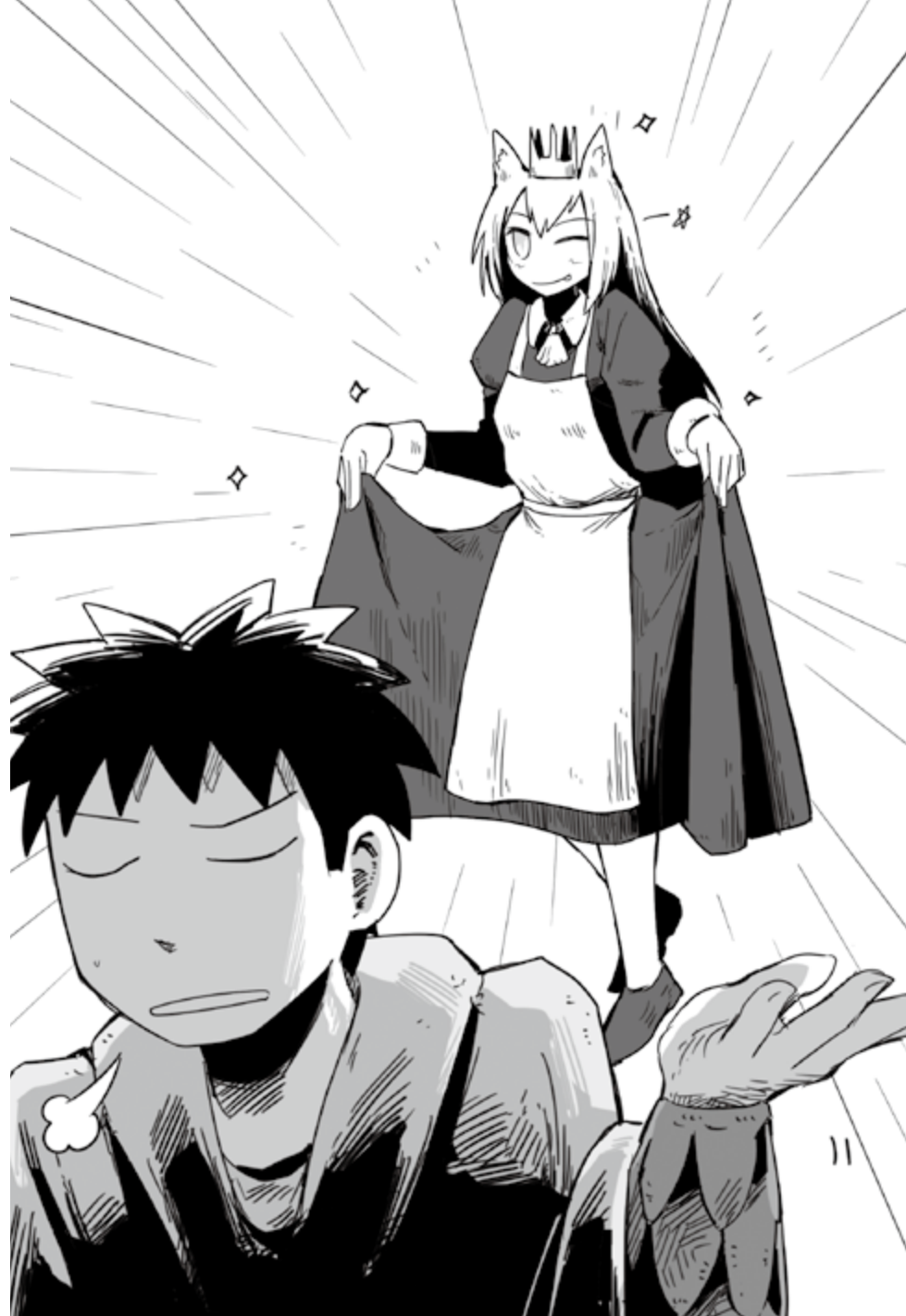
自分の棒読み台詞に、ぷくーつと頬を膨らませる分身体。

つか、いい加減こいつの名前を決めるか。色々とありすぎてずっと放置してきたけど、いちいち分身体だと考えるのもなんだかなーと思ってるし。

さて、そうするとどんな名前にしようか。あんまりにも適当では可哀そうだし、凝ったの考えるのもそれはそれで面倒くさい。名前を付けるのは難しいな……うーんと、これにするか。

ぷりぷりとお怒り状態の分身体に向かって、自分は口を開く。

「えーっと、今の今までかかったが、名前を決めるぞ。これからはお前を『ルエット』と呼ぶことにする。いいかな？」



突然の名付けに、膨^{ふく}れていた顔がぼかんとした表情に切り替わった分身体……いや、ルエット。
ちなみにこれは、こいつが女王の影、即ち『シルエット』であることから取った名前である。安
直だが、自分の頭から引つ張り出せる中では比較的響きが可愛い……と思われる部類ではないだろ
うか。

どうやらようやく状況を理解したルエットも、途端に表情が緩んだ。

「遂に、遂に私にも名前が与えられたのですね！ これでもう私は、あのクイーンとは別の存在と
なった！ 嬉しいですよ！ 今日是指輪から出てもいいですよね!?」

いい訳ないでしょうが。これから二週間以内にとんでもない事件が起きないとは限らないのだか
ら。冷たいかもしれないが、こっちの世界だって冷たいときには容赦なく冷たい。

「ダメだったの。いざつてときに切り札が使えないのは困る」

ルエットは再び頬を膨らませたが、そのうち『そ、そうですね。いい女というのはいざという
きに頼りになる存在であらねばなりませんね』などと勝手に自己完結していた。

まあ、それでいいならいいよ、実際、エルを失ったときのような追い込まれた状況を打破できる
助っ人として頼りたいのは本音だからな。

そうしてルエットと二、三雑談をしながら装備を整えていると、部屋にルイ師匠が入ってきた。

「あ、アース君起きたのね。じゃ、食事をとって軽く体を慣らしたら、いよいよ今回の修行の仕上

げに入るからね。そのつもりで心の準備をよろしくね」

そうか、さんざんボコボコにされながらも何とかついてきた修行の成果が出る 때가、遂にやってきたのか——って、そうやって気持ちを入れられれば良かったんだけどなあ。

何というか、今回はほんとにただただ目の前に出された課題とかルイ師匠との組み手を必死でこなしてきた記憶しかないの、いまいこうしつくりこない。本当に自分の技量とかは上がってるのか？って疑いの感情ばかり浮かんできてくる。

そりゃスキルのレベルはいくつか上がったけど、それで戦いに勝てるっていう世界じゃないし。

といつても、行動するしかない訳で。『考えるな、感じる』の形で行くことにした。とりあえずやってみれば何か分かるだろうし、考えるのはそれからいい。

新しい技を教えるとも言われているのだから、それなりの進歩はあったはずだ。そうでなければ、仕上げに入るだなんてルイ師匠も言わないだろう。

宿で食事をとり、そこから訓練場へ移動。アクアは今日も見学である。これが終わったら、思いつき走りさせてやらないとな。

「じゃ、始めに軽くやりましょうか。その前に、アース君は装備を全部解除してね。今日はこの訓練場出るまで、装備を着けちゃダメ」

ルイ師匠の指示に従い、全ての装備を外す。カースユニークの指輪は外しようがないので勘弁し

てもらったが、これで着ている物は街の人と変わらないシャツとズボンだけになる。

ここまで無防備な姿を曝すのは、基本的にログアウトするためにベッドに入るときだけだ。こんな昼間にこの姿になったことは今までにない。

「これはあくまでウォーミングアップだから、気楽にね」

すみません師匠、そんな言葉を信じることはできません。

ほらやつぱり！ 師匠から飛んでくる蹴りのスピードがまた上がった！ ちょ、まっ、反撃する余裕がない！ これのどこがウォーミングアップなんですかつ！

師匠の攻撃を避けることは当然できず、攻撃がかすり始め……やがていいのを貰い始めてノックアウトされる。これで気楽に、と言う師匠は鬼や！

「うんうん、程よく温まったわね。じゃあそろそろ本番と参りましょうか」

くっそう、負けてたまるか！ と気持ちをを入れて立ち上がる。

やり方はあれだが、確かに体がほぐれて、ほんの僅かにあった緊張感は見事に粉々になった。よし、何でもやったらあ、かかってこいやあ！という気分である。

「さて、まずは……アース君の放てる最高の蹴りの技を私に当ててもらおうかな。ちなみに、私は絶対に避けないで防御に徹します。なので、とにかく一発が重い、もしくは連続攻撃で一番攻撃力が高い技を私にぶつけて頂戴ね」

どういうことだ？ こちらの一撃をわざと受けるとは。とはいえ、やらなくちゃいけない雰囲気だよな。ならば、あれで行くか。本来は相手の体勢を大きく崩さなければ当たらない大技なんだが、絶対に避けられないのであれば、その前提条件は無視できる。

「では、行きます」

そう告げてから、自分は「痛風の洞窟」にて伝授された《幻闘乱迅脚^{げんとらんじんきやく}》を発動。脚力を生かして跳躍し、幻影を纏う。纏えた幻影の数は分らないが、さつきボコられたことや気合いの入り具合からして、かなり大勢になったと思う。この幻影達にも攻撃能力があるからな、多いほどいい。

「伝授技、《幻闘乱迅脚》！」

気合い一杯の大声で宣言し、ルイ師匠目がけて急降下しながら蹴りを繰り出す。自分の蹴りはルイ師匠の腕に防がれたが、このアーツここでは終わらない。そこからさらに、幻影が次々と追撃の飛び蹴りを繰り出し続ける。

全ての追撃は師匠の腕に集中……崩せるか？ 一撃を入れられるか？

「はっ!!」

「うおあっ!？」

が、ダメ。ある程度は効いていると思ったが、師匠が腕を振ると簡単に吹き飛ばされた。背中から地面に落ちたので結構痛い。ドラゴンスケイルアーマーも外套も着ていないから尚更だ。

それにしても、《幻闘乱迅脚》を真正面から当てたつてのに貫けないとは……現時点で自分が使える最強の蹴り技なんだがなあ。

「——なるほど、しばらく姿を見せなかったなりに新たな技を磨いていた訳ね。気になる点も多いけど……いいわ、新しい技を教えるにふさわしい技量が身に付いたと判断しましょう」

認められたのは嬉しいけど、悔しい気持ちのほうが強いな。自分の本領を封じた形での一撃とはいえ、満足できる結果ではない。せめて一歩ぐらい後退させられれば、ここまで悔しい思いをせずに済んだかもしれん。

が、いつまでもそんなことを考えていてもしょうがない。もつと新しい技を覚えて、自分の力を伸ばさないと。弓は成長限界を迎えているが、蹴りはまだ上がる余地がある。落ち込むことはない。「そうね、今の貴方に教えられる技は……一つは《風華蹴^{ふうかしゅう}》。そして《風結蹴^{ふうけつしゅう}》。この二つね。まず、《風華蹴》は竜巻のように回転しながら下段、中段、上段と蹴りを入れていつて、最後に飛び蹴りで横に吹き飛ばす技よ。《風結蹴》は、蹴りを入れながら相手を風で作る結界の中に封じていき、最後のひと蹴りで結界の中に溜めた風の力を炸裂させるという、エルフ流の奥義の一つよ」

お、遂にはつきりと奥義と言ったか。だが、「今の貴方に」と言っていたから、さらに上があるんだらう。自分がその習得条件に届くかは分からないけど、それは後回しだ。

これから実演してくれるみたいだから、しっかりと師匠の動きを見て、どういうアーツなのかよ

く理解しないとな。

4

「さて、早速伝授を開始するわよ。まずは技を見てもらわ。そしてその後で実際に動いてもらおう。それだけよ」

ルイ師匠はそう言い放つが早いか、訓練場に設置してある、人をかたどった的に向かって猛然とダッシュ。近づいたところで竜巻のように回転したかと思うと、ローキック、ミドルキック、ハイキック、飛び蹴りの四連続攻撃を行う。

ただの四回攻撃ではなく、回転を加えることで威力を増しているのか。おそらくこれが《風華蹴》なのだろう。蹴りが命中したときに、花のようなエフェクトも出ていたし。

「これが《風華蹴》よ。下から順に蹴ることで相手の体勢を崩しつつ逃さず、そしてトドメの飛び蹴りで吹き飛ばすという流れになるわ。この設備を破壊する訳にはいかないから、さっきのは手加減していたけどね。さ、見せたのだからモノにしなさい。今の貴方の力なら、十分に扱うことができる技よ」

システム画面には『エルフ流蹴技・《風華蹴習得》のきっかけをつかみました』と出ているし、あとはとにかく師匠の動きをできるだけ真似して挑むだけか。

竜巻のように回転しながらの蹴りだから、目が回らないかが心配なんだけど。そんなことを頭の隅っこで考えつつ、まずは動いてみる。接近してから回ってロー、ミドル、ハイキックと繋げてとびげっ……つと、ここで転んだ。飛び上がるのができなかったのだ。

「もうちょつと回転の速度は落としてもいいわ。最初はゆっくりでもいいからまず四連続の蹴りを完遂できるようにして、それから徐々に回転の速度を上げていくようにね。焦ることはないのよ、きちんと習得できるまで付き合うから心配しないで。今日中に習得しなければ許さない、なんて言うつもりもないし」

——そうか、ちょつと焦りすぎていたかもな。ならばまずは、ロー、ミドル、ハイ、飛び蹴りの流れを体に馴染ませるか。ある程度馴染ませたら、徐々に回転を加えて行こう。

一、二、三、トドメ、一、二、三、トドメ。そんな感じで黙々と的に向かって四連続の蹴りを放ち続ける事しばし。そこから、ゆっくりとした回転を加えたローキックを放ち、安定してきたらミドルまで、さらに安定したところでハイまで繋ぐようにした。

（むう、回転を加えた状態でハイキックを放つと、どうしてもバランスが崩れるなあ。《重心安定》のパッシブがあってもキツイ。自分は何か間違っているのか？）